

人間性回復の環境教育の理論と方法の開発

～新たな学際研究グループの船出～

- 司会：仲間秀典，医学部公衆衛生
討論：加藤憲二，医療短大・一般教育
内川公人，医学部・寄生虫
藤山静雄，理学部・生物
藤原孝之，医療短大・理学療法
酒井秋男，医学部・スポーツ医学
柳平担徳， 同上
那須民江，医学部・衛生
小山 裕， 同上
応答：丸地信弘，医学部公衆衛生（素材提供）

R&D on the Theory and Methodology of Environment Education for the Recovery of Humanity

～the emergence of a multi-disciplinary study group on environment education～

Hidenori NAKAMA, Kenji KATO, Kimito UCHIKAWA

Shizuo FUJIYAMA, Takayuki FUJIWARA, Akio SAKAI

Yasunori YANAGIDAIRA, Tamie NASU, Yutaka KOYAMA and Nobuhiro MARUCHI

Multi-disciplinary Study Group on Environment Education, Shinshu University

Key words : living together, unity in diversity, paradigm shift/normalization, environment education.

はじめに

環境教育の研究グループ結成の必要性は数年前から本学の環境科学研究班の集会で語られており、幸い今年度から松本地区でその学際的な環境教育の研究グループが発足した。われわれは秋から数回の例会を開催し、参加者が主題に関しどんなイメージを抱いているか討論し、記録を残し、その後に具体的な素材に基づいて討論する段階になった。

丸地は世話人の立場もあり、本稿の前に掲載した主題にかかわる学習素材（丸地信弘著：共生の時代の健康科学の教育・実践・研究の総合的接近）を提示したところ、多くの参加者がそれを素材に討論を行えば主題に関する各人の思いが明確になろうという意見になり、今回の座談会開催の運びとなった。

なお、この学際的な環境教育の研究グループは全員

が理科系学部にも所属する教官十数名である。今回も「学習素材」の意味を説明したが、数人の参加者は不慣れも手伝ってそれを勘違いしたようだ。しかし、共通の思いをもつ人が主題接近の初期段階でどのような考えを抱いているか知ること、ある種の共感と反発が生まれ、それが将来的には二十一世紀の要請に見合った環境教育の指針の提案に繋がることを期待している。なお、読者をお願いしたいのは、この座談会記事と前記の丸地論文でワンセットとして頂きたい点である。

討論の方向

司会（仲間）：僕は同じ教室の丸地先生が討論素材を提案されているわけだから、進行役には相応しくない。だから、別の人が出来れば有り難いのですが、先の集会で指名を受けた一人ですから、今日は司会を

引き受けましょう。それでは、今回の内容に絞って討論という事でよいですね。

丸地：そうです。

内川：今回の集会は、こういう事が総合研究として使えるかという意味を含めて、この素材に対して色々な意見を述べたり、質問したりして、それを環境科学の掲載内容に持っていこうという事だと思ふんだ。そういうニュアンスで話を進めていったらよいんじゃないかと思ふんだ。

丸地：形式はそうだと思います。

内川：そのほか、いわゆる環境教育はどういう風に流れているか。あるいは、これからどういう方向を取るかという事も含めていいんですね。

環境教育の受けとめ方

司会：ではこの辺で、今後の環境教育に関してそれぞれの方のコメントを一つ簡単をお願いします。

加藤：どういう風に話していいか、マクロの所から話をしますか。例えば、環境教育は健康科学という言葉にも繋がっていますが、非常に広範囲な問題とどうやって繋いでいくか。丸地先生の仰っている事は保健領域の話ですね。その保健領域の問題と私自身が今まで関わってきた環境科学的な生き物サイドと人間サイドをどう繋ぐかという事が大きな問題だと思ふんです。保健的なものは非常に現実的なフィールドがあって魅力があるが、一方、環境科学はサイエンスとしたら面白いけれど、現実的な事に関しては余力を發揮してこなかった歴史がある。環境科学の中で実践していると云うか、そういうコンセプトを使って実践していると人々は云うのですが、その二つをどう結合していくか、この二つの間のギャップはどういう埋めるのだろうと思ふことがいつもあります。ですから、それがこの研究グループの取組みという事が言えるでしょう。

司会：加藤先生が冒頭で仰られた通り、いわゆる実践研究と云うのと、総合研究という二つがある、そういうことですね。

加藤：いま申し上げたのは、保健領域と広い意味の環境科学というものがどういう風な関係かと云う意味付けをしたいと云う事ですね。ですから、環境科学というものを僕自身は組織化したいという気持ちもあります。

那須：このワーキング・グループは確か環境科学教育の学際的研究というタイトルと理解していたものですから、今日はそういう発言をしたいと思ふます。

まず、目的が何かという事ははっきりしないと、な

かなか自分の意見をだしにくいと思ふんです。それにしても、環境教育はタイムリー問題だと思ふます。ちょうど、私達が学生の頃から仕事し始めたころは公害ということで、環境問題と云うのは公害に対する批判という形で動くんですね。最近はおかつてのような重大な公害は少なくなってきた、私達の身の回りから色々な問題が発生してきているというのが、これからの環境問題でしょう。つまり個人がそれぞれ環境問題を考えていく時期に来ているということだと思ふます。

そのためには、環境教育が一番重要になるだろうと云うことです。だから、小さいときから、私達も含めて、環境ということを考えなくてはいけないということです。これから環境問題のキーワードは物質循環とリサイクルです。今までは発生源を押さえる考え方だったんですが、環境教育も方向転換が必要な時期かと思ふます。

もし、このワーキング・グループの活動が環境教育に重点を置くのであれば、私は環境基本法と環境条例を中心に健康科学という立場から参加したい。環境についてみんなで知恵を寄せ集め、それで大きな環境教育の方法論みたいなものができればいいと考えています。ですから、最初にこういう目的でやるんだと云うものを出しておかないと、討論しにくいと思ふます。

内川：科学者の問題だと思ふのですが、研究者の立場というか、我々に求められているのはいわゆる評価とかいうものなんですね。そう押しつける側に回らない方がいいだろう。むしろ、そういうのを批判する立場に回るべく努力するのが我々の立場ではないかと思ふわけですね。今ちょっと聞いていると、例えば身の回りから出るという表現をされるけれどその内容は個人の問題に還元されるような形になってきているのであれば、非常にまずいわけです。だから、そういうものを広げるより提唱する方が今は大切と思ふのです。

那須：私が申しあげたのは教育に重点を置いた場合のことで、時の流れというものをある程度加味しないといけないと云う事ですね。研究に目的がある場合はまた別です。だから、その目的がはっきりしないと討論にならないのではないのでしょうか。

内川：それはそうだけど、どちらの立場に立つかと云う問題だと思ふのです。それで目的も変わってくると思ふ。つまり広げる方に回るのか、それを改善する方に回るのか。それは同じ事柄に対して二つの立場があると云う事ですね。もう一つは、加藤さんの言っている環境科学の新しい捉えは私にはわかりにくいんですよ。つまり、そう云う事であれば我々は相当に遅れて

いるということになる。

司会：酒井先生、どうですか。

酒井：僕はちょっと次元が低いかもしれないけれど、環境教育っていうのはまず環境科学を研究し、それを社会に広めるというのが環境教育じゃないかと思うんです。それで僕らは研究をやらなければいけないっていうのがまず一番あると思うのです。それで、それを今度はいかに市民や学生に広めるかという、それを含めて環境教育というのではないかと僕は理解しているんです。一番大事な事は、それを今度はいかに広げるかと云う事で学生に対する講義だとか、シンポジウムだとか、それから討論会を開くとか、外国のそういう事をやっている人を呼んで講演を聞くとか、やっていったら何が一番効率がよいかと云うような事を話し合うのがこのグループの仕事だと僕は考えています。

それで、丸地先生のプリントで読ませてもらったんですけど、こういう事は大事だと思って、僕もある程度はわかっていたのですけれど、僕個人にとって考えてみれば論文を書く時のイントロダクションで自分の研究に対する位置づけを書いて、それで目的、方法、成績、討論、結論というような形で書いてやるのが普通の書き方で、それを学会に出します。だから研究そのものに対して今ある体質を続けていっていいんじゃないかという感じがするわけです。

したがって、丸地先生の言われているような事は、それぞれの研究者がバックにして持っていればよいと感じています。

司会：研究をする事によってある知見が得られると、その知見と云うのを社会に広めていくことが環境教育ということですね。

酒井：そうです。それが僕は環境教育ではないかなと思っています。

司会：柳平先生、いかがですか。

具体例から環境教育に親しむ

柳平：僕の立場としては具体的な例を取り上げることから始まります。ちょっと話が飛んで申し訳ないのですが、「我らの地球から始まって、地球的規模で考え、地域の規模で行動しよう」という総合・相互的な立場がありますが、どうしても我々はこの地域的規模で行動しようっていうことになるわけですね。

たとえば、高校生が環境問題について資料を集めてやっています。社会のニーズがかなり強いらしいんですね。騒音とか、振動とかを社会科で勉強しようとしてるわけです。色々資料を子供らが集めたんだだけ

ど、わかんなくて、環境白書に載ってるかなってみると、そこにも出てないんですね。こんなことじゃだめだと、地域で必要だと一番欲しかったのは松本空港の騒音をあげて、振動とかそんなような事を高校生が調べなきゃいけないという。そんなような事を一つの環境科学として研究する。環境教育と云ったらそれを教育する、されるための研究をしていなきゃいけない。そんな小さな事がどこにも載っていない。誰かやっているかもしれないけれども、地域の問題って云ったら、地域の人がやるしかない。本当は誰かやっている筈なんですけれどもね。そんな細かな事を地域で起こせる行動があると思うんです。前にも繊維学部でやったゴルフ場の問題など、あんなような事から始めて、それが今こういうような状態になっているんだと云う事、やっぱり研究の立場からやっていく。地域のこういう問題があるんだって云う事の方が僕は重要じゃないかと思うんですね。ですから、どんな小さな事であってももう少し大きく広げて松本もこんなに変わって、長野県もこんなに変わり、高原もこんなに変わって、どんどん課題はあると思うんです。

そういう何の事例でもいいんですけど、一つの事例をはっきりさせて、それをどういうまとめでいくかという環境科学の問題が大きいと思うんです。そういう具体的な事例から大きな環境教育を作って欲しいって感じがします。

司会：環境或いは環境教育に関する考え方と、その具体例ですね。小山先生どうですか。

小山：私は健康と環境という感じで捉えてきたんです。その中でとにかく環境と健康の関係と云うのはいま現在でも頭の中でかなり混沌としていて、ちょっとうまく話せないんですが、環境科学と健康科学ではかなり考えてます。殆ど重なっている部分と、それとそれ以外の部分の重なっていない部分をこの場でうまく整理でき、その結びつき、その関係がわかればと思って参加しています。

多様な立場からの環境科学への接近

藤山：私は今までずっと生物学の方から環境科学というか、普通の言い方をすれば色々な生き物というか生物の色々な多様性を守っていくと言うか、そういう風な視点、目で環境と科学に関ってきました。そういう立場からすると、生物学を専門にしている人間の環境教育がどういう視点が一番大事かという事、多分、若干医学の方の専門にされている方と視点が違うと思うのです。例えば、僕らの立場からしますと、生物的な

自然を保つ事が人間の健康にも非常に大きく影響しているし、そういう基礎的なところが非常に重要だと思っ
ているわけです。

そういう視点で実際に講義などもしていますが、それ
ともう一つその中で感じるのは、そういう生物学的な自然とマクロな自然を考えた場合に、全ての人間という
ものが環境科学には関わっているんだ、加害者であり
被害者であると言う風な立場にあると云う事ですね。
その辺の認識というか、やっぱり実際に環境科学を研
究すると同時に自分達の色々な生活の中でどういう事
が可能か、そういう処を掘り出して皆にこれは非常に
身近な問題なんだと云う事を再認識してもらおう。そう
いう色々なアンケートをとったり、どれくらい関心を持
っているか、そういう評価をやったりしているんで
すけども、こういうのは多分に専門が違うとやっぱり
それぞれ私はこういう視点が一番重要だと思っ
ている、そういう違いが色々あるわけで、そういうのはイン
テグレーションしなければ僕はいけないと思っ
ます。そういうものを色々な形、総合的な形で提示でき
れば、それを見た人が今度は逆にこういう視点からも
のを考えなきゃいかんとか、最初からこういう環境科
学とはこういうものと云う風に結論しなくても、それ
ぞれの人が色々な立場で私はこういうものが大事だと思
うんだと云う事を、そういう視点から述べたり、或
いは自分の研究を通じて主張していけばそれが一つの
本になり、そういうものにまとまる。或いは大学での
講義にまともなものがあれば、それを聞いた人が一体ど
んなのが本当に大事なのか、それは各人判断していただ
けるし、そういう事を提示する事が僕は重要だと思っ
ております。

それから多分に色々な意味でインパクトを与える
と僕は思うんですけど、僕らの立場からすると、今の環
境科学のあり方と云うのはどちらかと云うと応急対策
みたいな手法ですね、直ぐに結果の現れやすい手法に
どうしても行ってるんですね。だけど、もっと根本的
なところから考える必要もあるだろうし、その辺は
色々立場によって違うと思っ
ますが、その辺の立場の
違っ
て云うのは現れてもいいと思っ
し、そういうも
のに皆がやっぱり関心を持って、自分の身近な問題だ
と云う事をきちんと認識してもらえることが一つのア
ピールする理由なると思っ
ますね。

司会：一つお聞きしてよろしいですか。例えば酒井先
生が仰られたように、研究をする事によってある種の
データや知見が入りますね。それを社会に広げて行く、
還元していくというのは一つのオーソドックな環境教育

だと思っ
のですが、そういう事に関してはどうお考
え
でしょうか。

藤山：勿論、それぞれの先生方が理念を持っておられ
るというのはやっぱり研究を通して出てきた結果だと思
うんですね。それともう一つは同時にこういう事が
重要だと思っ
ても、必ずしも研究としてはできないと
云う立場もありますね。その辺のなるべく重要な事に
近づきたいとは思っ
ているけれども、僕だったらそう
いう生物を扱った立場で、大事な生物を保存していく
上で何が重要かという視点を考え合わせます。そう
いう事が人間にも跳ね返ってくるという考
えを持ってや
って
ますけれども、ただ、それは自分の専門性との関
係でそういうやり方をしている部分もありま
して、それと同時に
もっと色々な意味の環境科学の本を読んで、
そして自分の研究の位置づけだとか、そういう事を更
にやった上で
こういう事が大事という風に思っ
る視点も
あり、その辺、両方とも僕は重要だと思っ
ますね。

環境教育と Applied Human Sciences

藤原：遅れて申し訳ありません。僕の立場としては専
門からちょっとはずれた部分なんで、やはり藤山さん
の仰っていたそう云う部分から間接的な関与しかでき
ないです。しかし、環境教育と云うのは教育機関にお
ける環境教育の捉え方と、我々は外にフィールドを求
めて和歌山県の串本町と信州の信濃大町、北安曇、そ
れから南佐久、それから油壺と三鷹と松本市という形
で地域住民の健康調査を地域差のあるところで色々実
施してきて、それが環境の影響というものがかなりオー
バーラップしてきて、それを抜きにデータを解析でき
ない状況に直面しています。ですから間接的な要因
としての環境が、我々がいま使っている Applied
Human Sciences の中に要素として入ってきたという
考
え方をして
います。

それでちょっとこの本筋から外れるかもしれませんが
けれども、先生方が何人かお入りになっている学会で、
最近 Applied Human Sciences に名前が変わりました。
その変わった理由は色々あるのですけれども、やはり
学際領域が広がってきて、工学系の人や教育の人が入
ってきている。それと自然科学だけではなく、社会科学
系の人もその中に入ってくるんで、それで名称変更
したのです。その中の傾向で我々の近いところを見て
みますと、そこに入っている人たちは現場で活動して
いる人と教育研究機関にいる人とい
るわけですが、や
はり教育機関における環境教育のターゲットと地域に
おけるターゲットは必ずしも一致して
いないと云う認

識を持っている人たちが多い。

我々はたまたま大学にいますから、大学の使命というものは何かというのは考えたいとは思っております。この前のミーティングと今回のミーティングの間に考えた事で環境教育に対して大学の使命と云うのは何か、特に信州大学に与えられた命令は何かというのをやっぱり明確にしていくと云うことですね。その中には理念の確立というものと、もう一つは柳平先生の仰ったリサーチの実施と云うのは何か具体的なテーマを持ってやっていないと、我々が外に対して物が言えなくなります。だけど、理念がなくてやる訳には行きませんので、個々の研究はバラバラでも、大学の使命は環境教育に対する理念の確立という一つの大きな目標と、実際に動くためのリサーチの実施の二段階があり、それをツールとして我々がやっている個々のリサーチを表現して行く、ツールとして考えて行けばいいという風に思っております。

司会：ありがとうございます。丸地先生、いま藤原先生が発言されましたが、二つの観点にたち、最初の理念の確立と云うのは多分に先生の目指している所だと僕は受け止めたんですが、これから皆さんのお話の感想も含めてコメントをお願いします。

素材提供者の最初のコメント

丸地：そうですね、大体は皆さんの発言は理解しましたので、ごく簡単にコメントしましょう。今日の話題は今後の環境教育が中心ですね。それで、環境教育と環境的な対策と研究は部分で重なる訳ですから、僕は環境科学を広い意味で捉えています。それは問題解決指向という事が前提にあるからです。

それで、「三つ輪が重なりあっている図式」をイメージし、そこに環境教育・環境対策・環境研究の三者を当てはめましょう。従来は、環境研究から入る人達が多く、それから対策そして教育と移る傾向が強いので、環境教育が一番遠くになってしまうんです。それで、僕らもそういうことを色々な事例で何年もやってきたので、いっそのこと藤原先生が言われたようなヒューマン・サイエンスすなわち真ん中から環境教育に入ることになりました。勿論、生物学的なことも入ってきますから、人間特性を的確にキャッチする事によって、それらを全部ふくめて環境教育がヒューマンな形でやれないと、対策もできないし、研究をやっても成果が実のあるものとして理解して貰えないだろう。そういう状況が僕がやってきた五～六年前のユスリカ対策、最近のAIDS、その他に地域福祉の問題にしても、

みんな同じになっているのです。

そういう事ですから、二、三の方がおっしゃったことと関係づけさせますと、何が目的か、これが目的だと思っていると、大枠を見失いやすいので、上記のように三位一体で全体だと意識したいと思います。その事を踏まえて入口は教育であり、それができれば対策があるし、対策を皆が力を合わせれば、やらないときより有意差がでなければ話にならん訳ですから、それを科学的に研究する。そのことは常に循環するという風に考えれば自己矛盾はないし、今の地域活動がそう云った形で進んでいますし、取り分け二人三脚と言っている比喻が非常に当たり前の言葉なんですけど、こういう風に切り替えた事で現場の人の仕事のやり方がと上がるという訳で、これは実に面白い事です。こういう風にひとまず簡単にお答えいたします。

司会：この配布資料で提案されたのはヒューマン・サイエンスで、その全体を含んでいると云う事ですね。

丸地：そのとおりですね。

頭で分かるが、実際はどうか

内川：大変に総括・統轄的で非常にスムーズに説明ができるようには受けとめられるんだけど、一般の人達にどういう風にするかって云う行動の概念がないんじゃないかと思うんだ。例えば、これを見たときに一般的にはわかるんですよ。そういう風にやればいいんだろうという。これは観念としてはわかるけれども、これは実際そう云う活動の起動力になるかっていう事なんだよね。そこを説明してください。

丸地：皆さん方に配布した母乳哺育運動と云うのは、これはもう3、4年やっていて、とりわけここ一年間は伊那保健所管内の10人くらいの保健従事者が毎月一回集まってやっていて、初めの段階は内川先生が言っていたような状況でしたが、今では相当に前向きになっております。

それからもう一つ実践に動いているのはこの間の会合でもお話したように、来月タイの二つの大学でそれぞれ三日ずつよく似たセミナーをしますが、この場合の前提を極く簡単に申し上げますと、去年も今年もそうなんですけど、大学の全部の学部から数名の人達を呼んでセミナーをやったんですね、今度もやるんです。その根拠は何かと云うと、大学院大学の学部長や副学部長が、うちの先生たちはみんな非常にスマートな事を外国へ行って勉強してきている、知識を持っている。だけれど、身近かな問題にはなんら手を汚そうとしない。一つ例をとればAIDSに関しては何もで

きないのではないか。これじゃあいけないと云う事で結局、去年と今年と学際セミナーをやる事になったんですね。それで、三日のセミナーだったんですが、非常に反響がよく、今年もやってくださいという話になったんです。面白いのはですね、配付資料でもちょっと触れていますが、最近いっぺん打ち合わせしたら、今はAIDSと結核の問題がすごく大きな問題になってきた。それを今回は更に踏み込んでやろうと云う要請を受けて、その事も相当射程距離に置いて提案をし、それから具体的な素材に関して検討をして、自分達がどこまで実際の教育、研究に活かせるかと云う事をやっていますし、現に両大学も今年度からそれぞれ私達のセミナーを導入して大学院の特別コースを発足する事になりました。

そういう事を含めて、僕は空想を言っているのではなくて、非常に現実的で、僕らのように大学に籍を置いたものとして、まちがいなくそういう方向へ進んでいるという事を申し上げておきたいと思います。

環境科学における学際的な関わり方

加藤：広い意味で、この丸地先生の出されている意味は、我々研究者が環境問題をどうあつかうかという、その関わり方に対する新しい考え方ですね。と言うのは、今までにも話が出たように、自分が専門としている領域をリサーチして、それで得られた結果をまず専門ジャーナルに書いて、もう少しそれを蓄積した段階で、展望を一般誌に書いて、あるいは新聞に書くとか云う形の関わり方と云うのが一番オーソドックスな研究スタイルですね。

それに対して、今迄の事例は例えば柳平さんが言われたように、非常に個別的な事にしか関わらない、関わる事ができない。それは良いとか悪いとかじゃなくて、個別的な事に関わる事を前提とするんですね。それが今までの一つの非常に良心的な部分ですね。もう少しずい奴はどうするかと云うと、例えば朝日新聞の編集者じゃないですけど、彼は環境ジャーナリストだけど、日本の事は一切云わないですね。個別の問題事は非常に大事なんだけれども、自分のリサーチにどっぷり浸かってやるとしたら限られた事しかできないし、多くの場合は政治の中ですね。そういうものに対して、これは現実に関わろうとされているわけですが、一つのあり方を示されていると云う事じゃないですかね。で、内川先生の仰らうとされているのはこれから中に入って議論して行っているじゃないかとそう思うんです。

丸地：そうですね、問題ははっきりしているね。上から入ってくるか、下から入るか。

内川：唯、多くの方が下からつまりこれだけに関わりたいでいる理由の問題だと思うんだけど、主体としては自分のリサーチを通じて何か貢献できないかっていう考え方なんですね。そうでないと新たにそれにどっぷり浸かってやるのは我々の立場ではないという意識が強い。

司会：僕は大小関係の理解の仕方については少し違和感を持っているんです。理念と云っても今の段階で色々な理念があるわけで、そうするとその多様な理念の中で自分の専門性を活かして社会へ還元するという立場は採りにくいと思うんですね。寧ろその理念の形成というのと別にそれぞれの専門性を活かした社会への還元と云った形で、双方の事を同じに考えていくと云う立場の方が僕としてはわかり易いですね。

柳平：たとえばAIDSの問題でもいいです。僕は全然知らないけれども、AIDSの問題をやるとすればEnvironmental Researchはちょっと入りにくいですね。もしそういう問題をやるんだってできない。よい主題があって、そういうのが下から入れば、下から入って行ってうまく行けば一番いいと思うんです。それで、どういう仕事を目的とするかと云うような事を決めて貰いたいと、決めた方がいいんじゃないかと思うんです。一番必要な事は、いわゆる環境教育では何が一番必要で、どんな具体例が必要かって云うような事をもう少し話し合ってもいいんじゃないかと云う事を僕は考えています。

司会：その辺はどうなのでしょう。

内川：それに他の研究が位置づいてくれば、こんな事がある、あんな事があるという、例えば特定研究だけで総合研究のこういう分野をやって行こうと考えているんだけど、なかなかそう行かない、話し合いにならない。だから環境教育と云うのは大きなものとしてあるんだが、それを主題を決めて個々に検討でききれば一番いいんじゃないか。

研究と実践と教育の調和

藤原：考え方として、教育と研究を分ける必要は全然ないと思うのです。研究は独自に展開されている部分と云うのがあって、そういう下からのアプローチがあると思うのですが、その研究の中に教育を巻き込んで行くというか、研究と教育の融合や調和の様な考え方をすれば、大学の中の活性化はあると思うんです。事例になるかどうかわかりませんが、先ほど申し上げ

た地域の住民調査などすべて参加型でやっています。そういう形のものの中に方法論として体験させると云う事ですね。そういう環境教育があると思うんですね。

ですから、研究を展開する中で教育が実践できないと云うものではなく、その部分で環境教育は実践教育に対して重点を置いてよく、それは一部の方法論だと思います。ですから、理念が先ほどから問題になっているんで、それさえはっきりしてターゲットが決まったら、方法論は学生参加の教育研究の展開というのが僕は望ましいと思うんです。

丸地：今までの発言を受けて二つほどコメントします。さっきの発言の中で僕が言わなかった事に素材化という事があります。今日は配布資料を学習素材にするという事で集まっていますので、その事を忘れないで自分の発言をつなげて戴けると発想の転換につながると云う事を一つ申し上げます。それから二番目は理念という話が出てきました。理念と云っているのは哲学ないし理念ですね。誤解を招かないようにしたいのは、私達は実践教育だけど、普遍的なものを求めているわけですね。理念と云うのは本来は普遍的なものでありたいわけです。ただ、現実問題はある環境対策など考えた時に、国の置かれた状況とか文化の相違などがあるので、一概にそれをこれだと決めつける事はできません。これは外国へ行って仕事をした人はよくわかると思いますが、やはり人間として一緒に仕事をする上でのコモンセンスと云うのは何であるのか確認すると、そういう理念に基づく各学問分野の理論ができています。それに基づく応用としての研究、要するに仮説検証が成り立つわけですね。そういう事がありますので、やはり僕も教育と研究は分けられるもんじゃないんですが、どうも現実の問題としてはその部分を分けて懸からないとその先に進められないと云う事を考えている方が多いと云う事を僕のコメントとしてお話ししておきます。

素材討論のための軌道修正

加藤：タイトルも決まっているんで、環境教育を学際的に勉強しようと思って集まってきて、とりあえず素材としては丸地先生の書かれたものを勉強して、色々意見を交わそうと云う事で集まっているわけですから、そういう話に絞りましょう。

藤山：今回は環境教育というテーマで学際的な研究グループが出きたので、ある意味で僕は今まで既に十数年いわゆる環境科学の研究グループが活動していて、それぞれ色々な形で成果を発表したけれど、そういう

事に対してこれは最終総括ではないけれども、少なくともある意味で中間総括と云うものは必要と思うんです。やっぱり我々は研究する集団ですから、当然何もなくてもいつまでも続いていくと思うんですけど、ただそれが対外的に見た場合に十数年も研究して来て、一体どういう事その間に達成され、どういう風な事を中間的に結論づけられるのか、そういう風なある意味の纏めみたいなものですね、そういう視点が必要だと思うので、それを普遍化したのが環境教育だと思っているんです。

加藤：そのベースにある環境科学は、僕はまだ学問として成立していないと思っています。だから、どういう方向で学問になるかと云う理論につながるものがみえはじめればいいんじゃないかと思います。

丸地：今の発言も受けて、さっきの発言をフォローしたいんですが、立場という話がありました。それぞれの専門性それはあるので、それはやればいいんです。だけれど、いま国際的に言われているのが「多様性の中の一体化」ですね。これをどう具体化するかと云うのが自然科学でも社会科学でも人文科学でも云われているんですね。だから、それを綺麗ごとで収めるのではなく、私達は環境科学ないしは環境教育を素材としてどうするのかと云う事がいま問われているわけです。それで、大学の場ではとりわけ教育に活かさなきゃいけないし、教育実践が本当に効果を挙げているかも検討しなきゃいけないということで、「多様化の中の一体化」と云う重要性を改めて強調すれば、みんなが学際研究を一緒にやろうと云う思いを持ってくる。

ここで全体に大変つながる事を一つ申し上げます。さっき加藤さんがちょっと言われた時に出てきた話ですが、分かりやすく言うと、自然科学、社会科学そして人文科学、これは言ってみればみんな含めて人間科学なんです。こういう関係で考えれば、立場性も自ずからはっきりすると思います。

Unity in Diversty と羅生門効果

加藤：今のことに関連して言えば、それはUnity in Diversty。非常にいい言葉なんです。しかし、これは何だって議論したいんです。言葉がイメージとして定着しているが、それでいいのか、ここでどう捉えたら環境科学の中にこういう考え方を位置付けできるか、それを議論してからこの言葉を使いたいのです。

丸地：ですから、全部をこれでまとめるという事では全然ない。使っている用語を定義して、その解釈については自分の今までの研究のキャリアと照らし合わ

せて解釈し、自分なりに統一見解を出す、自分でそういう事をしようと思っっているんです。

司会：今日提示された資料をベースにして討論するという合意があったのですが、そうすると討論を限定されるような危惧があるんですが。

丸地：それはないね。それは素材化をどれだけするかということで、その心配はない。そこに拘ったらこういう多様性のある学問を持った人達が同じ状況では話せなくなってしまう。僕は残る40分の間に今までの事を踏まえ、もう少し一歩前に行けば整理し少し加筆すれば、こういった事を指向している人達の集まりの座談会としてはまとまるだろうという希望を持っています。

加藤：まだ厳しいのではないですか。

丸地：いや、書くのは限られていますからね。

藤原：では、方向性としてその目標があって、いま多様性について論議していますが、やっぱり最後は広がったらどこか纏めて一つ作ると言う作業過程があってやっているわけですから、可能なら今度はダイバージェンスからコンバージェンスの方にすべりこむ作業に進めて戴ければ、いけるんじゃないですか。

共生とは何か

加藤：では、その議論をスタートさせるのなら、今回のレポートは一つのパラダイムとまで云わなくても、一つのアプローチとして提案された。これを自分のキャリアや自分の今の思考に照らして解釈し、質疑し、議論する、そういう方向ですね。

難しいところからはいるのは大変でしょうけれども、一つ簡単な言葉の使い方なんですけど、共生という言葉がありますね。先生は英語では Living Together と訳されている。これは非常に分かりやすいんですが、研究者とターゲットの共生と言う言葉で我々生物学の方から云うと、これは Symbiosis から始まった言葉です。厳密には相利共生と云うことばかりいまエコロジスト達がこれまでその概念をひろげたかと云うと、Sym・Biosphere と云う言葉として使われ始めていますね。非常にまだ宙に浮いた言葉ですが、そういう共生と言う概念から来た言葉と地球環境と云う言葉との位置関係の捉え方が一つあります。エコロジスト達は共生と云うコンセプトを何となくそういうのがよかろうと云う価値観まである程度入れている訳ですね。だから、その次のダイバーシティの話に移りますと、これは研究としてもまだ始まったばかり。そういう流れに対して、特にヒューマン・サイエンスをやってお

られる方に丸地先生はたまたま Living together と云う言葉が使われていますが、その辺の感想を伺いたい。
丸地：その関係の事をちょっと他の2、3の方に言って戴きたいんです。

内川：これは一般的に使われている言葉なんですね。
丸地：共に生きると云うのは新聞、マスコミ等で一般に使用されています。

加藤：では、さっき言いました日本語としては共生なんです。ドイツ語では多分ここの意味は Mit-Leben でしょうか、ものすごくきついんですね。だから、それと symbiosis と云うのはやっぱりお互いに立場って言うか視点が違うんです。

司会：僕は共生って云う言葉に関しては、いわゆる環境倫理学と云うことを思いうかべます。あの限界を初めからわかって使っているのが人間を相手にする人達の考え方と思うんです。人間、生物、環境をつきつめて考えれば共生は本当はありえないと思うんですね。それを人間社会の中ではできる人がいるんで、それが共生という考えだと思います。

加藤：ここは、一番大事なところなんですね。だから、大事なところはやっぱりごまかしているんですね。そこを整理して行ってよいと思うんです。

藤山：いや僕はね、その共生と云うところを共食いと云う位の意味に解釈してるんですけどね。我々が言う共生とはちょっと違和感がありますね。

加藤：もう一事例を言わせて戴きますと、Diversity と云う言葉は非常にすわりが良く使われるんですね。多源性って云うのは、多様性が意味があるかって云う事はまだ議論の最中ですよ。今ではたとえば多様性が意味がありますと云う事を多少科学的にどう説明をするかと云うと、いきなり遺伝子資源としてジーン・プールとして意味があるという話にいっちゃうんですよ。本来、エコロジストは多様性は感覚的に大事だと言って、1950年代からエルトンらの主張もありますが、何とかサイエンスにしようとして動きだしたらいきなり遺伝子資源として意味があると云う事で世間は動くんですね。それに対する、例えば僕や藤山先生も同じだと思うけど、大きなギャップを感じていて、自分の中でも曖昧なまま前に行っているという現状なんですね。
丸地：ちょっとその意見が出ないので、お話ししますね。皆さんに示している、とりわけ日本語の訳注はそれに非常に関わっている内容です。これはあくまでも、問題解決、問題対応を科学的に従来の疫学やら統計の手法も取り込んでやるにはどうするかと云う事をよく考えて言っているという事をまずお話ししたいと思いま

す。私どもは自然科学的に研究したものは科学的認識をするため客観性と云う言葉を使っている訳なんです。が、伝染病の時代には主体と客体を分けて、さして問題なく対応できたんです。

ところが、地域医療とか環境保健となると主体と客体が一緒になって、要するに住民参加で活動していかなくちゃいけないわけですね。そうすると、そういう認識が必要なんです。皆さん方に差し上げた資料で言うと、主客を分けるよりも寧ろ主体、客体、組織がどうやって一体化するかと云うことです。そういった事を社会でみんなやっていく時には、保健・医療・福祉の連携という言葉があるんですね。それをさっきの話じゃないけど、どうやって矛盾なく入れて行くかと云うことなんです。そうすると、そういう接近過程で具体的に対応していく時には、時間と空間があるんです。これはある活動をやっていけばこうみえてくるというのがありますね。それで、その後は評価なんです。評価になると、これはよく言う質と量があるんですね。

そうすると、自動車の四輪に当たるように皆がチームを組んでやっていく理念と理論で、実際活動の評価では相手だけ見るんじゃなくて、活動している自分達の体制がいいのか質の評価もしなくちゃならない訳ですね。ですから、これは本来分けて考えちゃいけない問題ですね。そういう事が前提になっておりますので、哲学用語には慣れていないんですが、主客一体、質量一体でアプローチする。それに必要な概念が現場の保健婦さん達にわかるよう入ってるのがこの配布資料なんです。

僕らも、言葉として知ってるだけで、こういう事にやたらに哲学用語を使わん方がいいと云う感じはするんですね。ただ、この資料の話で言うと、オダム達のグループがやっている新しいジャーナル (EcosystemHealth)、ああいう関係の方が気持ちとしては近いんですね。でも、あれも新しい言葉をたくさん出して来るんで、僕らがフォローしようとする、ちょっと引かかるのです。いずれにしても、上の事を抜きにしてはこの問題は語れないし、皆が力を合わせて一緒にチームを組んで対策活動をしたら、やらないよりやった方がいいには決まってる訳だから、その結果は有意差が出るという前提で仮説検証する訳ですね。そういう当たり前の事を自分達の社会問題の中にも取り込もうと云う事です。だから有意差が出ない事も非常に大事です。逆に、有意差が出ないと云うのは、やった事は間違っており、大して効果のない事をやったと

云うことになるのです。

内川：じゃあそうすると、対話って云う事が行動している事なんですか。

丸地：対策ですね。平たい言葉で言うと対応ですね。チームワークで行う時は対策と云う言葉を使うんですが、対策があり、それに伴って行動も伴って評価につながる訳ですね。他に読み方として、例えばこういう処に字が書いてあるのは、それを説明するのに便利な言葉です。それでこれも二人三脚で成立するようにしてあるんです。二人と云うのは此処で言えば二つに書いてある項目ですね。それが外側の支援環境を意識し、もう少しキャッチできると、この中味の方がわかってくる、そういう意味合いなんです。だから周りに書いてあるのは、いわゆる支援環境が書いてある訳ですね。ですから、ちょっとした評価図みたいな物なんです。説明をするとこれはものすごくたくさんの項目になるんです。

内川：と云う事で、加藤さんがさっき言われたような定義とは違うわけですね。

加藤：それははっきりちがう。ただ僕は根底で、多分 Mit-Leben と云う言葉で言えるようなものもあると云う気がするものですから、もう少しここに踏み込みたい。共生という言葉を使う事にどういう意味があるのか、可能性があるのか、それがしっかりしたものになるのか知りたいのです。

内川：言葉をこういう風に使うから問題になるんでしょうけど、即、事大的になるという事なんだよね、そういう事でしょ。

丸地：現代の健康科学の決まり文句で云うタイトルでしょ。共生って云うのは何となくみんながはっとするのでしょ。同じ地平に立つ共同作業と云う意味で共通していますから、そういう事はいやだという人はそのチームの中に入らない訳です。

Think Globally

加藤：もう一度その最初の処について言わせて戴きます。デュボスの名言は確かにいい言葉ですね。Think Globally, Act Locally。例えば、教育という事を考えて、これを説明すると一人当たりの活動量を関数に換算して云々なんて話ももの本には書いてある。やっぱり、そういう事しかできない部分があるからそう書いてあるんですね。そうじゃなくて、本当にこの二つ間をどうつなげるかが課題ですね。

丸地：これはですね、実際にこういう風にしたのはここ2、3週間の話ですね。背景としては僕がWHO

の短期コンサルタントで1991年に本部で仕事をしたんですが、その時の雑誌に出ており、その中で知ったんです。それ以来は好きな言葉で使っています。不思議なことに、学生にこれを話すと、どこでも受けがいいんですよ。受けのいい言葉なら使ってやろうという事でよく使っていたんですが、その内に誰が言ったんだろうという事で、この間うちの大学院生に調べて貰ったらDubosが言ったといっていました。

加藤：1960年代ですか。

丸地：1960年代でしょうね。結局ね、やはりこれはワンセットに考えないといけないという事が一つあり、それで僕は先の言葉に関心があるのは、外へ行って色々な人と一緒に仕事をするわけですが、国民性とかの開発段階の違う所の人たちと一緒に仕事をやるということが、やはり Our Planet, Our Health, それから Changing Needs ということを確認しないとだめなんです。その上で加藤さんの今の質問に答えると、地球的規模で考え、地域的規模で行動しようということが、具体討論をすると多くの場合は前者が抜けて後者がさっき柳平さんがいったようになるのです。それで動きやすいから、いつでも討論するときには“Think Globally, Act Locally”で行こうと言っています。そのくらい実は含みのある事柄と僕は考えています。

加藤：これはすばらしいと思いますけども、だからこれはいいんじゃないですか。考えるのはどうしようもないでしょう。みんな地球的規模で考えながら行動するって、これはこれですばらしい事だと思います。

内川：だけど、これ分かるし、いいんですけど、こういうグループがこれから何をしていこうっていう事つまり指針ができなくちゃいけないですね。

丸地：そのような行動指針を作ろうという事で数年の準備作業をやってきて、それが今年何とか具体的に動こうというのが今回の配布資料なんです。

内川：だから、また初めに戻るけども、将来的にどういいう問題がでてきても、行動する指針が出来てくれば、対応が出来るという事ですね。

丸地：それをみんなと一緒に仕事をするときの紳士協定にすれば、チームワークで仕事が出来るといいう事です。

内川：普通の文章で提示せず、思考をこういうパターンで提示するという事はやっぱり可能な限り避けなくてはいけないと思うよ。

丸地：そういう意味では先生方に差し上げた資料にしる、それからこういう日本語の資料にしても、いわゆる学術論文の体裁の流れとそれを含む体制はいつでも

出来ます。そういう形で書いてます。ただし申し上げますが、それは具体的な事例に関する事例研究の効果判定ではないという事は是非知っていて戴きたいと思います。逆の言い方をすると、先生方が事例研究といっているのは既存の学的体系の中で理論と方法を使ったアプリケーションの訳ですね。僕はここでお見せしているのはそう云った事も考慮した上で、今日の話で云えば「共に生きる」という発想での認識と対応と評価を同じサイエンスの基本を外さなくて人間中心ないし患者／住民中心の発想で表現した内容です。

司会：まあ、次々に変わるといっても、僕はそういう変化には比較的寛容です。例えば古代のギリシャ哲学以来弁証法という方法論があります。だから、その場で合わないというところがあったから話し合いの中で、自分としてはこの領域を取り入れて、また新たな提案をしたと考えればよいと思います。

丸地：何がどう変わったか伝われば問題ないですね。

共生原理, 共生疫学の理解

柳平：話を進めていいという事であれば、「共生疫学」の意味が一番わからないんで、説明して戴きたいと思います。

丸地：これはですね、人間頭部の比喻で理解して戴くとよいと思いますが、既存の医学疫学を左目とすれば、十年前に右目の予防疫学という考えを提案したんです。今までの医学疫学は主客分離でやりましたね。それを主客一体、即ちチームワークで働く、やればやらないのに比べたら差が出るから、右目と左目の間に差が出てくるのがよい対策活動だという事です。そして、その二つを合わせる心の目を僕らは「共生疫学」と呼ぼうと提案しているんです。それは何故かと云いますと、これまでも臨床医学と云うのがありますね。この臨床医学の基本的なステップを言っていますが、此処で医者と患者の関係に注目したいと思います。

内川：臨床疫学ですね。

丸地：いやいや、臨床医学（医療実践）です。ここで臨床医学と云うのは、実はAIDSと結核の併発の問題と結びついているんです。従来の医学は実践では医者と患者の関係を大切にしてやっている人がたくさんいるんですが、現実には疾病の方の結果だけ見ている訳ですね。それ自体はいいんだけど、もっと医師と患者の関係で共に生きていくという前提で考えないと、AIDSの問題だけで結核の問題を考えられなくなってしまいうのですね。タイではAIDSの患者さんが結核を併発して3分の1の人が亡くなっている。そうす

ると、①臨床医学、②共生疫学、③予防疫学、④医学疫学の四者で考えないいけない。そのためのエンジンとなる「共生原理」は常識になってくる。

主体性の4原則と組織化の4原則、それに共生実践を合わせたものが共生原理だと思って戴きたいのです。普通はこの右の方から左の方にアプローチして欲しいんですね。ところが、共に生きるのだったら逆の方向で、左の方から右の方にアプローチした方がよいと云う事で、そういう順序で空間的にはこうしか書きようがないものですから、それで表現しているという事なんです。この原案が出来たのは、さっきお話したタイでAIDSと結核の問題を是非取り上げてほしいといわれて、当初はどんな風にできるか疑問に思ったんですが、十年前に提案した予防疫学が従来のものにつながる事がわかって、瓢箪から駒がでたようなものですね。

そういう意味でこれを理解して戴けると、その後の事例評価の実施手順がかなり具体的に表現してありますので、分かりやすさが増すだろうと思います。ただ、この場合に注意をしておきたいのは、これは保健医療に関して患者や住民も参加したチームワークでやると、その成果は医者や看護婦だけでやった場合とは差が出る、そういう認識と対応と評価という科学研究で一番大切な仮説と検証ということですね。

少なくとも伊那の保健婦さんや、お医者さんも含めているんですが、その会合ではこれらは大体わかって頂いたと思っています。

司会：冒頭の一番右にそのようなことが記載されていて、こういう内容の研究をしているという訳ですね。

丸地：そうですね。去年3月に大学院生の張兵君をつれてバンコクへ行って、マヒドン大学で総合接近セミナーを行いました。その後、彼が30ページくらいのレポートを作って、それを同じ院生の魏寧さんに渡したら、彼女が読んで結局は「共生原理」という言葉にまとまらないかということで、この内容につながったという事なんです。始めたときは直感的に感じたんですよ。それがこの一連のシリーズに書いてある常識的な概念ですね。コモン・センスと言った方がいいと思いますが。それとつながって来たのが非常にわかってきたと云うわけなんです。その妥当性は来月のバンコクの総合接近セミナーで学際的な関係者と保健医療従事者を対象に2回やりますので、そこで確認したいと思っています。

司会：例えば新しい医学、臨床疫学と云うのも検証したと云うわけですね。

丸地：検証しようとしているところなんです。まだそこまではいっていませんよ。そういう意味ではこの図4をひっくり返した方が分かり易いですね。話の順序としてはThink Globally, Act Locallyで敏感な方を先に挙げといて、この4項目に関しては表で示す事で、機能と構造の関係を示しているんですね。

今度のバンコク・セミナーで検討したいと思います。それにはバングラディッシュの結核対策と、タイのAIDS予防対策のプロセスと結果を一応論文の形態で作っています。僕らはこれを試行錯誤の中で作ってきたので、まずは教育の場で活用して、これに基づいてAIDSと結核の合併に関する対策にどう活かすかですね。これにはまさに学際的な協力が要請される訳で、その時の基本的な認識形態と評価の理論ないし方法論として、此处で言っている新しい予防疫学・共生疫学の考えを提案しているわけです。

司会：この提案による色々な実践があれば、これは新しい臨床医学の例と云う事になり、そうすれば普遍的な教育につながる訳ですよ。

丸地：それを一番願っているんですね。

価値の転換

内川：まあ、場とか4輪駆動だとかそういう事はどちらでもいいんだけど、こういうのはオーソドックスな表現だと思うんですね。これを通じて、こういう物を出す事でなくてね、出した物が普遍的に使えと云う事を作り上げていく事が我々に要求されている問題じゃないかなと云う気がするんだよね。

丸地：それには2段乃至3段階が必要ですね。まず1段階目は僕らも来月実際にやる訳ですね。言葉の違う人たち、それから発想の違う人達とも一緒にやります。その後、実際に自分達の教育の中に取り入れようとしているんです。それから、常にワークショップとかセミナーとか教育の場で提案し、それがどういう風を受けとめられるか、それを確認しながら軌道修正していく。4輪駆動だとかガソリンとかエンジンというのは、人間は比喻を使わないと、なかなか理解しないんですよ。やはり皆が好んで使う言葉と云うのはそこに本質につながることもあるわけだから、それを出来るだけ活用した方がいいと云うのは僕らの色々な経験での姿勢なんです。人間関係で行われる事の理念とかそういうものを考えていくと、ケストラーの言った言葉が非常に普遍性を持って理解し易くなるという事なんです。我々が色々な教育の場面でこれを使うと、お互いの理解、それから私が言おうとしている事の理解の方

がうんと速まる経験の方が害になる事より多いんです。
加藤：そうしたら、ついでに英語の表現でコメントしておきます。Paradigm Normalizationのところですか。ノーマライゼーションと書いてるんですが、これはどうも僕は change の方がいいと思うんですが。

丸地：保健分野では、まずパラダイム・チェンジという表現があり、その次にパラダイム・シフトという言葉が出てきました。しかし、なんか定着しないんですね。それで、僕はこの造語を考えたわけです。

加藤：では、ノーマライゼーションの持っている意味とといいますと。

丸地：これは僕が確定したとは言えませんが、英語でやる時にはシフトやチェンジより相対的に適当なんです。他の用語に関しても、我々が接するのはネイティブでない人との国際的対話と云うのが多いんですが、キリスト教系は違和感がないですね。それから仏教関係もあんまり違和感は言われませんね。

二つの四原則に関しては、1978年にまず組織化の四原則が提案されたが、それだけではプライマリ・ヘルスケアをうまく説明できないと云うので、1986年に主体化の4原則と云うのを私どもが提案したんです。そうすると、これは個人を指している訳なんです。この自立、学習、対話、共感というのは一緒にチームワークでやるときにそういう形で臨もうというわけです。これを自動車のハンドル乃至はハンドルを握っている運転手に例えると、それが一つの交通安全指針のようで分かりやすいと言おうと思ったんです。

配付資料では、全部二人三脚モデルと云う風に言っていますが、これはとりわけ現場の保健婦さんたちの意見で、それまで二人三脚の原義となるようなTAUCOと云う略語であったのを二人三脚と書き変える事で、言葉だけではなくて人間的な発想ができ、非常に便利だというので、それ以降こういう風に切り替えています。

藤原：私にとってはちょっと目新しい言葉であり、非常に新鮮で刺激的な言葉がたくさん入っているんですが、やっぱりアクト・ローカリーというのが最後にひっかかってくる。1999年に横浜で私達の学会、国際学会を開きます。その時のテーマがIntegrated Culture and Environment。最初に私がCultureという提案をしてワシントンに持って行って会議にかけましたら、アメリカ側からブリッジ・カルチャーというのはおかしい、ブリッジングにしろという事で進行形をつけた。そうになると、どうしても関わり合いとして私は文化と

か環境の橋渡しの仕事もどこかでやらなきゃいけない。その時ちょうど環境教育というのがあって、今日の参考資料も読ませて戴きましたし、外国のセミナーの状況も聞かせていただきましたけど、やっぱりアクト・ローカリーに行く方が具体的で、僕らもそのように動いていると思います。

ここで示された理念に関しては、自分でもそういう物を作って行かなければならないと思います。ここでは自然科学系の先生方が、医学・生物学関連の領域で展開されていることが大部分ですから、しかも教育を環境科学という分野に直接・間接的に関わってきているわけですから、やはり今日のテーマの焦点というか、一番最後のコンバージェンスというのは、何か具体的な目標を設定する勉強会としてこういう組織が存続していくことにあると思っています。

先ほど話題に出たように、自分達の専門分野、つまりアクト・ローカリーの部分で活動したものが、今日のような話し合いを通してスイング・グローバリーという形で昇華し、我々の健康科学に貢献できるようになればと思っています。

司会：どうもありがとうございました。当初の約束の時間となりましたので、これで今日の座談会を終わりたいと思います。

平成8年1月21日(土)、午後一時～三時半
 信大医学部公衆衛生学教室で集会

編集後記

座談会から二ヶ月がすぎ、そろそろ忘れかけていた時に本稿のゲラに目を通した。新しいグループ・メンバーによる数回の集会の後に、事前資料も配布してこの座談会を開いたが、その討論内容は意外におもしろいと思った。

一部のメンバーから、この種の事柄を本誌に掲載する是非についての異論もあったが、事前の申し合わせで行った座談会であり、本稿のひとつ前の小論とワンセットにして通覧すると、参加者の専門や科学に対する意見が鮮明にでていて、読者にも意外に参考になるだろうと私は期待している。

この学際的な環境教育の研究グループがこれからどんな歩みをするか。今回の企画はその意味でも参加メンバーの初期における生の声を反映しており、今後の発展を見届けたいものである。(丸地)

(受付 1996年3月10日)